

## 話 術 の 變 遷

岡 鬼 太 郎

今回話術の講習といふ時に、話下手の私がお話をしますのは、所謂論語讀みの論語知らずで洵に烏滸がましい次第ですが、「話術の變遷」といふ題で何か話をせよといふ御命令で……。話術の變遷と申しましたが、歴史的事は専門の學者先生が世間に多くお出でになりますから、飛んだ檻襖を出さないとも限りません。デさういふことはざつとに致して置きまして、私が長年關係して居ります演藝界の、講釋、落嘶、只今申す講談、落語などに就て、少し實際方面のお話を致さうと存じますが、お話し申します中に、段々話術の變遷から脱線しまして、卑俗なお話になるかも知れません。

## 一 講 釋 の 始 まり

先づ講談落語に付いて申しますと、前に申しました通り、元は皆講釋、落嘶と申しました。「おとしばなし」とは「落」に「嘶」と書きました。時には「咄」といふ字も書きましたが、大抵は嘶といふ方の字を書いて落嘶。講談とか落語とか漢語めいた、しかつめらしい名前は近世に始まりましたので、昔は皆講釋、落嘶と申しました。さて講釋の初まりと申しますと、極く古いことは能く存じませんが、今より三百四十年ばかりの前、慶長の頃に赤松法印といふ人が

家康の御前に於て源平盛衰記又は太平記の類を読みました。これは勿論素讀ではありませんまい。それに多少味を付けまして、これを読み碎いたのでございませう。それからやがて家康の御前ばかりでなく、諸大名の前でもさういふ物を読みまして、これが大層歓迎されたのでございます。そこで最初は此の講釋師の御先祖を太平記讀と申しました。その後元祿十三年に江戸の堺町にたきまして、赤松青龍軒といふ人が軍書類を読み始めました。これは大道に葭簣張りの小屋を掛けて致したので、これを辻講釋と申しました。又それと同じ頃に名和清左衛門といふ人が淺草見附の火除地の空地の處で小高い軍書を講じました。それでこの小高い空地の處を後の世に至りましても、俗に太平記場と申しましたが、其の後享保の頃、凡そ二百二十年ばかり前でございませうが、神田伯龍子、深井志道軒などといふ人が出ましてこれ亦辻講釋を致しました。それから又寶曆七年の頃、今より丁度百七十七年前、馬場文耕、馬文耕とも申しまして大層文筆等も出來、話も上手であつた人が、木挽町の采女ヶ原で、やはり辻講釋を致しましたが、後に日本橋博正町の小間物屋の文藏といふ人の處で夜講を開きました。近所の人を集めて軍記物の類を讀んで聽かせました。これが講釋が野天から家の中に入りました初めのやうに聞いて居ります。それにこの馬場文耕や同好の人たちが、いろ／＼な記録や隨筆などから面白い種を集めて、これを潤色致しましたところから、自然講釋の種本といふものが追々に出來上つたのでございます。かういふ譯で、……一方の落嘶のことは後で申しますが……兎に角講釋や落嘶の本といふものは、今より二百四、五十年から二百年位の間に段々完成の歩を進めたのでございます。

それから又、百四十年ばかり前に當る寛政の頃に醫者の次男坊で森川馬谷といふ人が出ました。これは馬文耕の弟子筋でございませうが、この人が追々に纏まり掛けました講釋の讀物を分類して、先づ軍記物、それから御家騒動物、それから世話物とかういふ風に仕分けました。これは芝居の方で申せば、一番目、中幕、二番目といふ風で、これで大

體に於て講釋の種類なり、彩りなりが大體決りましたが、後世に至つては、更に世話物の中に仇討物とか俠客物、白浪物、因果物といふ風なものが出來ました。これは堅苦しい軍記物や御家騒動の武士だくさんのものよりも市井の雜事を脚色したものが既に世に好まれた爲で、どうも人間の感情が複雑になつて參つた自然の結果と存じます。さういふ風に市井の雜事といふことになり、幾らでも趣向を凝らす餘地がございまして、どんな嘘を入れやうと、どんな作り事を設けやうと自由自在、脚色が自由に出來ますので、段々面白い物も出來て參りました。それで講釋師の話術といふものも、最初の記録類の文章に即したやり方から、段々自分達の實生活に近い話振りになつて參つたので御座います。それが又近世になつては益々寫實風に傾きまして、講釋の方の世話物と、噺家の方の、落噺でない人情噺といふものと大分接近して參りました。

## 二 落語の變遷

緒、明治迄參りましたから、講釋はこの位に致して置きまして、今度は落語、即ち昔の落噺の方を申します。今昔物語等の古いことは私共の繩張り外でござい、それは學者先生にお任せ申しまして、徳川時代になりましてからのことを申しますと、一體落語の源泉は昔の落首、それから能の狂言、狂歌、それから俳諧、下つては輕口噺といふやうに段々系統を引いて居ります。萬治二年、今より二百七十五年前、この時に京都の人で安樂庵策傳といふ人が出て、輕口の本「醒醉笑」八卷を出しました。大綱みに申せば明暦、萬治の頃に輕口噺の形式化が現れたといつても宜しいかと存じます。それから延寶天和の頃、丁度二百五十六十年ばかり前、同じく京都の人で露の五郎兵衛といふ人が東山の際の祇園眞葛ヶ原あたりで矢張往來で話を致しました。これが辻噺、前のは辻講釋で御座います。この

人は後に露休と名を變へましたが、この道で大變人氣を得ました。著書としては「露のはなし」「露休置土産など」といふ本が出版されて、後世に残つて居ります。その後、元祿、寶永、正徳と丁度二百三、四十年前後に掛けまして、米澤彦八といふ人が坂地生玉の邊で同じく辻噺を致しました。これが大阪に落噺といふものを擴めました元祖かと思ひます。惜、次は江戸でございます。

貞享の頃、丁度二百五十年ばかり前に、江戸の長谷川町に鹿野武左衛門といふ塗物師がございまして、これが京橋の中橋小路で話を致しましたが、この人にも矢張り著書がございまして「鹿野武左衛門口傳咄」「鹿の巻筆」等廣く世に行はれました。下つて享保の頃、二百二十年ばかり前でございます。その頃にあやめ屋平次や、壽樂といふ人たちが、假聲入りの言ひ立てや芝居噺を致しました。それから下りまして、明和、安永、天明、これが噺家のよく申します「天明張りのお古いところ」で、落噺も段々俗分りがするやうになつて参りました。そしてその頃盛んになりました落噺の名人としては立川焉馬が現れました。この人は本名を和泉屋和助と申しまして、職人ではございますが、中々文筆の嗜みのあつた人で御座います。前に申しましたやうに矢張り何んといつても一流の祖を爲し、それを擴めるといふのには、文才もあり創作の力もなければなりません。唯人の眞似ばかりやつて居つては元祖とか、中興の祖とか云はれ賣出す譯には参りません。今お話した人たちは、皆文章も書き、自作自演を致しました爲にその道までか隆盛になつたやうに思はれます。それから天明六年、百四十八年前に向島の武藏屋權三郎方に於きまして、多くの人が集つて噺の會を致しました。これは前に辻講釋が家の中へ入つて來たやうに、辻噺が堂々と大きな座敷の中へ入つた初めで御座います。焉馬に次いでの名人は、文化頃に盛んでございました三笑亭可樂、この人は馬喰町の櫛屋であつたさうで、これが江戸の落噺の祖と謂はれる人でございます。それからこの可樂は文化年間下谷廣徳寺前の貸席で三題

噺の會を開きました。三題噺と申しますのは、聴手から一つづゝ題を出して貰ひまして、その三つの題を即座に一つの噺に纏めて落をつける。この落を商賣人仲間では「下げ」と申します。可樂はさういふ即興的な智慧もあり、噺も旨かつたのでございます。下つて嘉永年間になりました司馬龍蝶といふ人が怪談噺を始めました。矢張り講談に因果物といふやうな種類が出来ましたやうに、どうも人間は珍しい、不思議なものを好むと見えまして、人が殺されて化けて出る。燈火を暗くして假装したお化が出る。この藝は明治年間迄續いて居りました。

### 三 寄 席

かういふ譯で講釋の方なり、落噺の方なりに段々名人が出来まして、廣く世の中に行はれるやうになつた爲に寄席の必要が起りました。人寄せの席が市内——詰り昔の江戸御府内に澤山出来ました。明治年間になつて、最も盛んな時には東京市内で二百軒以上を數へるやうな事もございました。講釋場の數も多く、普通の噺家が出る寄席も數多くなつたのでございます。これは御参考迄に申上げて置きますが、「よせ」は本字で「寄席」と書きますが、かういふ方面に縁の違い方々の言はれるやうに「寄亭」とは申しません。東京で「寄亭」といふのは、寄席の主人のことでございます。イヤ餘事は併措き、明治になりましたは、皆さんも御聴き及びでございませうが、いろ／＼多くの名人が講釋にも噺の方にもございました。藝も旨いし、作意もあるといふやうなのは、講釋で伯園、噺の方で圓朝、この二人、どちらも自分の作が澤山世の中に残つて居ります。と同時に、斯の道に取つて幸なことは、明治十七、八年の頃に若林珪藏といふ人が速記術を編み出されました。そして此の若林珪藏、つゞいて酒井昇造、今村次郎、かういふ人達に依りまして講釋なり人情噺の速記本が世の中に出ました。藝人が高座に於て話す通りがそつくりその儘文字になるといふので非

常に歓迎されました。これが先づ徳川時代から明治時代に至ります迄の凡その歴史的變遷でございます。

#### 四 話し振りのいろく

處で、この歴史的變遷のほんの抜書き見たやうなお話は、何時迄やつても別に面白くも可笑しくもございません。さてその實際どういふ話振りであつたかと申すと、明治年間の實は兎に角、維新前のことなぞ勿論存じてるよう筈は御座いせんが、併しその時代の嘶の組立といふものは出版物に残つて居りますので、それを讀んでお聞きに入れませう。臍氣ながら凡そかういふ風に推移したものといふお察しがつくかとも存じます。撰びましたのは必ずしも代表的と申すので御座いせんが、ホンの見本代りに少し書き寫して參りましたのを、これから年代順に讀み上げますから、御迷惑でも御聽き下さい。一番初めのは二百四五十年前に當ります。元祿に出來ました嘶で、題は「能は嘘の種」、本文の文章通り讀みます。

「神は人の敬ふによつて威を増すとかや、千早ふる上加茂の神事能を、毎年水無月勤めけるに、近郷の百姓はじめて見物しけるが、連れの者にいふやうは、偕々能といふものは、大きな嘘をいふ事ちや、あの男は、此の村の庄屋のむすこ五郎作といふ奴ちやが、これは平の宗盛なりと吐かし居つた。」

次はそれより四、五十年後の延享年間の「百萬遍」といふ題の嘶で、

「數珠を繰りてゐる處へ、若き者來りて、お前は一日に何遍ほど繰らせらるゝと問へば、されば四五十萬遍も繰るか  
と存する、偕々驚き入つたる事かな、私は和尚様から、一日五千遍づゝの所作を受けましたが、何として大抵の事  
では繰れませぬ、私にお前の早繰りの法を御傳授なされて下されませと申す、安い事傳授致さう、先づ數珠の親玉

を取つて額に戴き、南無阿彌陀佛と一心に一ト聲唱へて、あとは同くく。

これは一寸ほんのりした面白い作意でございます。それから又二、三十年下つて、前に申しました通り、落嘶の盛んになりました明和、安永、天明頃の嘶の中で、明和のには、「通ひ小町」といふ題で、

「或るお公家様のお姫様に、まるらせ候の文附けたれば、今夜より百夜通ふて、夜毎に通ふた印を、車の榻に取付けよ、百夜過ぎなば必ず逢はんとの返事うれしく、雨の降る夜も風の夜も、通ひくゝて九十九夜目、車の榻へ取付け立歸らんとせし處、腰元出でて袖をひかへ、お姫様のおつしやりまする、お通ひなされて九十九夜、一ト夜ばかりは負けにして上げませう程に、わらはに連れまして、お居間へ直ぐに参れとの事、と云へば、此の男、只イヤハヤハヤとの挨拶、何故その様におつしやりますと云へば、アイ私は日雇でござります。

これは一寸皮肉な嘶で御座いますが、同じ頃のものに、短くて痛快ながあります。「浪人」といふ題で、

「雨の降る日は浪人と来て、晴れ間待つ張脇の門口、おあまり貰ひが立つて、お餘り下さりませう、浪人くすみ返つて、あまらぬ。

それから安永になりました「狩人」、

「出家狩人に出會ひ、そなたは物の命を取つて渡世するは悪い料簡、此の世でその様に毛ものを殺せば、來世でその通り殺した毛ものとなり身を苦める、悪い事は勧めぬ、殺生を止められよ、と宜へば、そんなら此の世で狐を殺せば、あの世で狐になりますか、如何にも狐に生れます、と云へば狩人涙を流して怖ろしがかり、やがて鐵砲に口薬をこめ、かの出家を目掛け進み寄れば、出家色を變へ、これは迷惑、どうなさると云へば、されば御意見に従ひ、來世の爲に貴僧を殺して、坊主に生れ變ります。

これは少し氣を附けて読んで居りますと、途中で落ちが分つてしまふ、餘り上乘のものではありませんが、この時代にかういふ作風もあるといふ御参考までに讀みました。下つて天明の「古道具屋」

「盗人が道具屋の店へ来て、大小を盗んで差し、一散にかけ出すを、隣りの亭主見付けて知らせれば、道具屋追ひかけて行きしが、暫らく過ぎて、悄悄と歸りければ、隣りの亭主、ヤレ／＼泥棒は逃げ延びましたか、と聞けば、イエ、二三四丁で追付きましたが、先きも侍、めつたな事は云はれませぬ。

これは一寸考へ落ちで、唯聽いて居つては何のことか直ぐ分りませんが、併しそこに作意がある、道具屋の主人がぢかに自分の店の大小を盗んで逃げる泥棒を見たのでない處に後の錯覺の可笑味があります。すつと下りまして、それから又四十年位後になりますと、大分洒落の悪いのがあります。文政年間の「神木」。

「丑の時まゐり、神木に灸をすゑてゐる、宮守り見付け、なぜ釘を打たぬぞと云へば、何を隠しませう、私が呪ふ男は糠屋。

これは糠に釘といふ譬から拵へた洒落で、落嘶としては餘り結構なものではないので、どうも近世に近付いて参りますほど、兎角理詰めになつたり、悪洒落になつたりして、ほんのりとした味がなくなつて参ります。かういふところから見しても、昔の作者口演者であつた人の話振りと、近世になつての人達の話振りとを凡そ想像することが出来ます。川柳の句を見ましても、矢張りさういふ感が深いのでございます。更にもつと悪いのになりますと、天保年間にかういふのがございます。「千本櫻」、これは狂言の義經千本櫻からとつたもので、

「ゆうべ呼ばれて義太夫を聞きやしたが、成程同じ音曲のうちでも、義太夫節の文句は感心なものだ、イヤ文句ばかりではない、趣向でも、人の名でもよく縁を取つたもので、千本櫻の三の口に、三位維盛の子が権を拾ふと、母御



の名は立樹に因みのある若葉の内侍だ、イヤ／＼まだそれよりは二の切で、渡海屋の銀平が剥げると、本名がの、ウム新中納言だ。

一寸聴くと旨いところを捉まへたやうでもありますが、淨瑠璃の原作者が元々新中納言だから銀平と洒落たので、それを更めて嘶の落にしたのでは根柢から智慧がありません。それから最後にかういふ理窟めいたものがございます。十年ばかり後の弘化年間に出来ました「どら息子」。

「おのれのやうなろくでなしに、此の身代は譲られぬ、今月も丁度十兩ばかり穴を明け居つた、憎い奴め、との強意見、ハテさう思ふなら、譲る時差引くがいく。

これは嘶として一寸面白い方ですが、さて、なんだか理窟ッはいといふ感じは免れません。

## 五 圓朝のこと

處で愈々明治年代に移りますが、當時の名人圓朝は前申上げました通り、立派な作意がありまして、幾十種といふ嘶を拵へました人で、新しい人情嘶、又新しい話術の創造者でございました。話し振りは全く舊習に泥まず、よくその時代の人の心を知つて居りまして、寫實やうのものをやる場合には現實に即したやうな話し方をするのが宜い、必ずしも落語家らしい愛嬌を主としたやり口をするには當らないといふ信念を以て話を致しました。一體圓朝といふ人はさう大きい聲の人ではありません、寧ろ小音、低い聲の人でございましたが、無論若い中から洗練された聲で、低いながらも能く通る、その聲で有名な鹽原多助の馬の別れといふやうなものを演る時には、先づ自らその氣分を作つて掛るといふことが得意であつたので御座います。その時代には高座に百目蠟燭を立てた燭臺が左右に二本出てゐて、

嘶家は湯を飲んだり此の蠟燭の心を切つたりする處にもコツがあつて、これでお客の氣を締める、講釋の方でも段取こそ違へ、呼吸は同じでございませう。これを藝人の方では「客の胸倉を掴まへる」と申します。掴まへるといふことは相手の心を自分の掌中のものにする、これが藝の秘訣でございませう。併しこれは自分の年功なり、技倆なりがそこに至らなくつては出来ない業で、師匠や先輩から聞いた教はつたぐらゐでは中々むづかしいので御座います。それで圓朝が鹽原多助の馬の件をやりませう時の如き、少し前屈みになつて、「コレ青よ……どうぞわれは辛エところも辛抱して、俺が江戸で金を貯めて歸つて來るまで丈夫で居て呉んろよ、や、やあ、青、青と洵に我が兄弟か奉公人にものを言ふが如くに言ひ聽かせながら馬の前面を撫でさせました」と、かういふ風にしつとりと話を致します。私は藝人でございませうから、旨くは出来ませんが、マア大體の工合だけをお傳へ申すので御座います。さういふ風にしてお客にあゝさうかと思はして置いて、後で以て馬も流石に感動したか大粒な涙をはら／＼と砂の中に落したといふことになりますと、満場の客が皆泣きました。馬が泣いてぼろ／＼涙を砂の中へ落した、簡単に申しますと、おかしうございませう。可哀想でも何んでもございませうが、併し前からその氣分を作つて置いて客の心を十分に自分の方に引付けて、さて馬がはら／＼と泣きましたといふと、聽く人も自然はら／＼と泣きたくなる。これが嘶の呼吸の旨いところで御座います。

## 六 場所の廣さ、聽手の種類など

面白くない話を長々と致しては御迷惑で御座いませうが、兎に角時間の御規定がございませうので、出し抜けに止めましては、後の方に御迷惑と存じますから、もう少し御辛抱を願ひます。餘興の藝人見たいで、お話が下品でお氣

の毒でございませうが、行き掛り上今度は講釋の方の眞似事をお聞きに入れます。が、只今申上げました客の胸倉を掴まへるといふことの外に又藝人の大事なことは、席なり或は御座敷なりの場所の廣さ狭さを頭に入れて掛かることで御座います。随つてその聴衆の多少、座敷などではそのお客様の種類、今日はどういふ種類の——種類といつては失禮でございませうが、或は今日は學者先生方が多くいらつしやる會である、或は商社會社の重役方の多い會である、さういふことを考へ、それからその餘興の場所の状態、お客様と鼻を突合せてやるのであるとか、それとも踊り舞臺のやうな一段高く廣い處に上つてやるのであるとかも、亦考へる必要があるので御座います。同じ義士の討入をやるに致しましても、そこに多少の手心がございませう。座敷などでは、

「頃は元祿の十五年極月中の四日、前夜より降りしきつたる雪はからりと晴れて月あかり、世間もしんと寢靜まりたる眞夜中頃忽然として本所松坂町吉良屋敷の長屋外に現はれたる一隊は、何れも山道だら／＼染の火事羽織に鍔頭巾、武者草鞋を踏み緊めたるは謂ふ迄もなき赤穂義士四十七人……廳で打出す袈々たる掛り太鼓は山鹿流三段流れの撥の沓え……」

とかういふ風に段々と疊み込みながらも、物靜かに重々しくやる方法もあり、多人數相手の廣い處では頭から「頃は元祿の十五年」とかういふ風に力強く讀む方法もございませう。

さういふ風でございまして、この話といふものは、私自身が下手で生意氣を申すものではございませうが、先づ廣さ人數の多少、それから今申しました聴手の種類といふことを考へることが、一番に大事なことで御座います。それから發音で御座いますが、産れ付き聲の小さい方がやたらに大きな聲を爲さらうとするのは無理なことで、これは修練の仕方次第で低ければ低いなりに行けるもので御座います。故人市川團藏といふ人は實に腹れ聲の人でしたが、歌舞

伎座に出ましても正面の奥まで聞える。これは多年廣い舞臺で修行しましたお蔭で、義太夫などにしても所謂惡聲難聲のの方が、苦心の結果なかく旨い味を語るもので御座います。それからメリハリ、上げたり下げたりの大切な事も申す迄もございません。無暗と一本調子だと、會社の決算報告でも朗讀するやうになつて、どうも聞いて居て面白くございません。

## 七 標準語、都會語、東京語

それから又訛りといふこと、皆さんの中には地方の方も居らつしやいませうが、東京では能く地方の方の訛りのこととを申します。放送局のアナウンサー諸君の中にも訛りがあつて聴き苦しい、お國言葉があるといふやうなことを世間の人から毎々聞きますが、それを非難する人たちがアナウンサー諸君以上に随分訛つて居る。どうも鳥の雌雄の一件で、どつちがどうか分かりません。ところで近頃、標準語といふことが能く問題になります。標準語といふと都會語、都會語とは又その中の大都會東京語といふことになりまして、先づ東京の言葉を土臺にしてといふことに今ではなつて居るらしく考へます。けれども、私をして申させますれば、今日の東京に果して東京語ありやと聲を大きくしにいでございます。私は演藝界などに關係して居りますので、案外外界の空氣の入つて來るのに縁遠い社會の東京人と可なり多く交際して居りますが、その人達の言ふことも必ずしも純粹の東京語ばかりではございません。百人の中九十七、八人迄は怪しいものです。こんな連中から何とか彼とか言はれる地方の方は甚だお氣の毒でございます。少し誇張して申せば、純然たる東京語といふものは、今の東京では中々聞くことがむづかしいのでございます。追々に實例を申しますが、突如としてかういふことを申しますと、前の話とはどうやら聯絡がないやうにも聞えませう

けれど、講談師にしろ、落語家にしろ、俳優にしろ、親代々の江戸ッ子、東京子を以て任じて居る人の中にも知らず知らず訛りが入り、諸國入り交りの言葉が入つて居るので御座います。東京の藝人であるから、彼等の言葉は定めて純然たる東京語であらうといふ風に、皆さんは餘りお買ひ被りにならないことを御注意申上げて置きます。

先づ訛りの一寸した例は、長唄の「杵屋」の發音の「ネ」が下がる、尾上菊次郎の「ク」が上がる、「梅幸」の「イ」が下がる、どれもアクセントが違ふので御座います。このアクセント違ひで私が大變困りました例があります。先年京都へ参りまして、京の四季の唄の中にある長樂寺といふ寺の所在を知らうと思つて、その邊の人に二三人訊いて見ましたが分りません。後で段々訊くと「長樂寺」を東京流に眞直に發音したから分らないので、唄を唱ふ通りの發音で、訛つて訊けば直ぐ知れたのでした。

ところで私が前に申しました親代々の江戸ッ子、今の東京ッ子、さういふことを以て都會人であるといふ誇りにしてゐる人達の家庭に、どうして間違つた言葉がドシ／＼出来るかといふと、これは皆小學校へ行行く子供達が學校から持つて参ります。それでさういふことには何の研究心もない爺さん婆さん、一番頑固であり、頑迷であつて、近頃のこととは耳に入れさうもないこれ等の人が、先づ自分の孫の可愛さにボーツとして知らず識らず小學校から輸入する言葉を覚えてしまふ。さうして親代々の勇みの家庭のお爺さんお婆さんたちの言ふことまでが、何時か純江戸ッ子でなくなる。而して又これが東京語でもない。皆さんも始終お聞きでありませうが、近頃大人でも子供でも「ねえ」といふ言葉を使ふ。「それでねえ」などと云ひます「ねえ」、これを皆今の子供達は地方語のやうな尻上りに云ひます。それが宜いか悪いかといふことを批評致すのはございませんが、兎に角昨今は何處の國の言葉か分らないのが續々入つて参りました。これは私自身の神經ではございますが、私に取つては厭なことでございます。又この頃一般にいふ何々

を「しなさい」。これは東京では人を目下に見た言葉です。現に新聞の家庭欄、婦人欄といふやうなものを見ますと、何々女史諸君が「決心しなさい」、どうとか「しなさい」。東京では番頭が小僧に向つて「早く水を撒きなさい」。とこんな命令的の時だけにしか使ひませんが、それもモウ今では一種の東京語であると私は觀念して居ります。東京語、都會語、標準語の見定めのみづかしいのは此處です。

尤も中には東京の言葉であるかないか、直ぐ分るのも御座います。東京のでない言葉に「兎も角」といふのがありますが、「兎も角」とは如何なる場合でも申しませんが、それから又この節の新聞等を見ますと、「騒動が起きる」。かういふ言葉は東京には絶対にございませぬ。騒動が起きたり寝たりは致しません、必。起る」と申します。それからこの數年來「ちよつと」といふことが矢鱈に流行りますが、これも東京では「ちよいと」で而もアクセントが違ひます。「ちよつと」と變な節はつけない、それから「下さいませ」も流行りものですが「ちよつと来て下さいませ」などといふ言葉は東京にはないので、此の場合は「ちよいと来て下さいませ」と申します。それから「なすつた」といふこともこちらでは申しませぬ。「なすつた」で御座います。それから「あそこ」といふことも一般語になつて居りますが、東京では「あすこ」、「す」でございます。日常三十分か一時間お話しして居る中にも、一寸これだけの言葉の違ひがございます。それから東京の人が能く槍玉に上りますのは、「ひ」と「し」の違ひで、東京人は「ひ」と「し」の發音が出来ないと謂はれて居りますが、この頃は小學教育が盛んになりまして、昔流に「しびや」だの、「しばち」だのいふやうな人は私共の知つて居る範圍では先づ御座いませぬ、強いて「ひ」と「し」の事を云へば、關西の人でも間違ひがあります。あちらでは「叱られる」を「ひかられる」と申します、どうも訛りといふものは仕方のないもので、「か」と「くわ」の發音のハツ

キリしない東京では堂々たる大會社の名がローマ字で「かいしや」と書いてあるのが澤山あります。重役連も昔小學校に居た時には假名遣ひを勉強したが、學校を出て偉くなると勝手次第だといふことは、文教當局の方にも御一考を煩したいと思ひます。

それから又近頃では、一般に「お」の字と「ご」の字の使ひ方が違ひます。一例を云へば、昨今の「お上品」といふ言葉私共は「ご上品」と覺えて居ります。それから又何んでもこの節は馬鹿々々しく丁寧にものを云へば宜いと思ふらしく無暗と「御」の字を附けたがるのも困ります。

銀座の大通りのある百貨店、名前は氣の毒でございませぬから申しませんが、食堂の衝立の眞中に貼紙があつて「お持參の品は」何んとやらして「お氣遣ひ願ひます」は大笑ひです。「御持參の品は」「御注意下さい」とあるべき處です。われ／＼の常識では「おぢさんの品だ」「おばさんの品だ」のは随分可笑いし、又「お氣遣ひ」とは心配をする案じるといふことでこれも珍です。食堂へ十錢か二十錢のものを食べに入つて、おぢさんの物にさう心配して居ては味も何にも分らない。イヤ、そればかりでなく、方々の百貨店の折詰の蓋の上に大抵書いてある文句、「少しも早くお召し上り下さい」との「お」の字は餘計です「召し上る」といふことが既に敬語ですから、その上にもう「お」の字は要りません。處がもつとひどいになると、「幾らく／＼お頂戴致します」「馬鹿丁寧に程があります。と、かう數へ立てると珍妙なのが山ほどありますが、もう大抵に致して置きます。

最後に申上げて置きたいことは、皆さんは辯舌のことに付て御研究ですが、餘り標準語だとか、都會語だとかといふことにお囚はれになりませんが、昔から云ふ通り「言葉は國の手形」、それを成るべく分り易く話すといふことで先づ宜しからうと思ひます。面白く可笑しく聴かせるといふことも時には勿論必要であり、折角の講演中の方々に欠伸の

弊などは困りますが、話といふものは、その話し方の旨いといふよりも、内容が第一です。殊に學者方の御話といふものは特にさうで、草稿と首ッ引きで、下を向いた切りの、丸で向ふへ聞えないのも困りますが、必ずしも能辯たるを要しない。人の心を感動させるには、結局熱情、眞面目といふことが肝要であると思ひます。話を力強くしようとするには、先づ自分の能く知り本當に固く信じて居るところのものを眞直に云ふに限りませう。自分の能く辨へ固く信じて居ることであるならば、たとひ少し位支へたり間違つたりしても、やがて再び話の本街道に出られるもので御座います。皆さんは話術の研究をなさる、勿論結構でございますが、術中の術は、只今申した眞面目、熱情、これが何よりも大切な第一義で、先づこれあつての技術技巧だと存じます。……餘り雜然たるお話ばかりで御座いましたがこれで失禮を致します。

拙き口演も忠實に速記せられたれど、文字になりては冗漫の特に目立つを恥ぢ、演者自ら其の甚だしき廉々を削除せり(鬼)



